

学力向上フロンティア校に3年連続で指定
普通科の新しい取組に御注目ください!

自分の意見や考えを論理的に述べるには? ～小論文講演会Ⅱ～



皆藤先生の熱い講演に聴き入りました。

2年生は、以前に御紹介しましたように、1学期に第1回小論文講演会で小論文と作文の違いや小論文の書き方等、小論文の基礎について学び、9月10日に小論文模試に挑戦しました。生徒の多くが、講演で聴いた内容を模試に生かす、あるいは講師の先生から『64点以上取ればかなりすごいで頑張っ!』と激励されていたその得点以上を目指す、という高い目標を持って臨んだ結果、返却されてきた答案は、200名中50名(4人に1人)の生徒が64点を上回る素晴らしい成績でした。

そして今回は、実際に添削を行っていただいた(株)ピアソン桐原経営企画室編集本部長である皆藤俊司先生に、『課題文型小論文を攻略する。』というタイトルで御講演をいただきました。実際に小論文の試験で、与えられた課題文を見たときに、主張を効率的に要約する手法、筆者の主張を的確に捉え、客観的な見方・考え方で自分の主張を組み立てる方法などについて熱く語っていただきました。同時に、日頃からテレビのニュースや新聞記事の内容を、小論文で出題されるテーマごとに分類して考える習慣をつけるなど、日常的な努力が大切だ、ともおっしゃっていました。

特に、「段落は800字で3～4段落に収めること。」や、「筆者の主張を踏まえ、自分の考えを述べるようにすること。」、「現在の社会情勢や時代背景を踏まえ、客観的な視点を大切に自分の考えを述べること。」など、今後小論文を書くにあたって意識すべき点について、本校生徒が実際に書いた小論文を直接講演の題材として使っていただき、生徒1人1人が現在持っている課題について、実感を持って講演を聴くことができました。

小論文は、他人の考えを正しく理解し、客観的な情報や視点に基づいて、読み手が納得する自分なりの考えや意見を述べるものです。受験対策のみにとどまらず、学力向上フロンティア事業の目標でもある読解力や表現力を高める取組として、自己の進路を切り拓く礎と位置づけています。

2年生は、この講演を受けて、同じテーマでもう一度小論文を書く取組(リピート小論文)に挑戦しました。第1回小論文の結果がどのように変化するのが楽しみです。



小論文講演会 全体風景

小論文講演会「小論文に強くなる！」生徒感想文

2年4組 矢野 智美 福知山市立日新中学校出身



「小論文」と「感想文」は別物。前回の講演を聞いて、自分の中では違いを理解したつもりでしたが、やはり、まだ理解不足だったようで、この間の小論文模試の結果に「これは感想文です。」といったことが書かれていました。何が違うんだろうか。そう思い、自分の書いた小論文と小論文テキストに載っていた例を見比べたり、今日の講演を聞いたりしているうちに、「違い」についていくつかわかったことがあります。それは、感想文は「経験」を書き連ねていくのに対し、小論文は「自分意見」を重要視し、それを支える肉付け部分として「経験」を少し書き加えるということ。そして、小論文は「自分の意見はこうだ。」と決めたら、ぶれることなく、最後までつき通すことです。今まで、どれだけ経験を多く書くかによって話をふくらませる、そして、より多くの経験を盛り込んだ方が充実した文になると考えていた私にとって、先ほど書いた2つのことは大変驚きでした。と同時に、自分は小論文の書き方が根本的に間違っていたと知りました。

今日、ほんの少しの間、小論文に関わってみただけで、これだけ重要なことがわかったのだから、もっと小論文について深く知れば、より多くの改善点が見つかり、今なんかよりずっと良い「小論文」が書けるようになると思いました。次の小論文模試で良いものが書けるよう、小論文についてはもちろん、社会で起きていることなどについても関心を持っていこうと思いました。

2年5組 四方 巽 綾部市立綾部中学校出身

今日の小論文講演は、2回目とあって、小論文はどのような点に注意しながら、どのような構成で書いていけばよいのかがかなり身についたように思います。前回にも聞いたことですが、小論文を書くために必要な力は大きく分けて2つあるということでした。1つ目は正しい文を書くこと。言葉遣い等を含めて、構成の型にいたるまで、正しい文章の作り方を学びました。2つ目は、内容を充実させるための知識を持つこと。極端な話、1つ目の力はみんながつけてくるから、できて当たり前のようなもので、2つ目の力でこそ差が付くのだということでした。言い方を変えれば、2つ目の力をアピールするために1つ目の力をつける必要があるということです。しかし、自分自身を見つめてみると、この2つ目の力が弱いと感じずにはいられず、不安になりました。この弱さを補強するためには、小手先だけの対応では無理だと思うので、1年後をしっかりとイメージしながら、具体的な対策を取っていこうと考えました。



